

GORO ノンフィクション劇場

岡田



歩く、真剣な表情の17歳が、ここにあった。新人賞連覇の実績で、ニューアイドルのトップに立った、有希子の深部に迫る。

それを聞いて、有希子は泣いた。しかし、そのまま名古屋にとどまるつもりはなかった。新幹線がプラットフォームにすべりこんできた。ドアが開いた。有希子が乗りこむと、やがて静

かにドアが閉ざされた。ゆっくりと、また新幹線は動きだす。そのとき、

「スター誕生」予選合格の日から、'84ニューアイドルの立った今日まで、佐藤佳代という少女は、何を考え、歩

音楽祭の賞金は、彼女の口座にふりこまれる



学校へはなかなか行けない



銀座音楽祭、有希子は大粒の涙を流した



新たな出発点に立った岡田有希子が持っていたものは、3つのバッグだけだ。その時点でも、岡田有希子はまだ未来の見えないゼロの地点に立っていた。

岡田有希子の450日

デビュー前の知られざる日々

特訓、ヘア、衣装、声質、エツクク…さまざまな準備

●データ①1984年の賞取りレースで岡田有希子が獲得したおもなタイトル——日本テレビ音楽祭新人賞。メガロポリス音楽祭最優秀ダイヤモンド賞。銀座音楽祭グランプリ。新宿音楽祭金賞。横浜音楽祭新人特別賞。あなたが選ぶ全日本歌謡音楽祭最優秀新人賞……。

生、クラスは65人。友だちはすぐにできた。

そのかわら、厳しいトレーニングが開始された。

週末の2日間を利用してボイス・トレーニングと芝居の稽古。まもなくそれにダンス・レッスンが加わった。いずれも2時間単位。みっちりとしごかれるのだ。

数多くの有名歌手を育てあげたボイス・トレーナーの大本恭敬氏がいう。

「ボクの教え方は厳しい。与えた課題をやつてこなかったり、言い訳するコには手を出すことさえあります。岡田有希子にも

その程度しかおぼえてないのなら名古屋へ帰れ」とよく怒り声をあげたもんです。あのコはぐつとこらえて次回にはきち

た。芸能コースの1年、

んとおぼえてきてました。けつして器用なコじゃな

い。でも一度おぼえたことは忘れなかつたね」

ダンス・レッスンを担当した山下康雄氏も厳しい指導で知られている人だ。



チェックされた。有希子の声はアルトである。そういつたデータを前にして岡田有希子のイメージ戦略が練られた。基本的には、有希子の生地をいかけた路線でいこうということになった。

●データ②初仕事——サンミュージックはデビュー前の新人にラジオの仕事やらせることがある。あの松田聖子も

早見優もデビュー前にDJをやっている。有希子は83年10月第1週の日曜日に初めてラジオDJの仕事をした。タイトルは「とび出せポップシティ」。生放送だった。テレビでもテレビ東京「ヤンヤン歌うスタジオ」のミニドラマに出演。有希子はお茶くみ娘の役を演じた。

レコード・デビューの半年ほど前から、プロジェクトチームは活発に動きはじめた。

サンミュージックは有希子のイメージを作るために、まずヘアメイク、衣装を決定。つづいて宣伝のためのポスター、プロマイド撮影が進行した。

83年12月20日。岡田有希子のレコーディングがスタート。曲のタイトルは「ファースト・デート」。竹内まりやが書いた曲だ。

有希子は、しかし、カゼをこじらせてしまった。「大事なときに……自分自身が情けなく、有希子は泣いた。



12月31日まで、有希子の賞レース連覇は続いていくだろう……

相沢社長がくりかえし話してきかせたことは、基本的にまず第1にファンを大切にすること、第2にス

キャンオンの渡辺有三ディレクターは、有希子が上京するとすぐに一口坂スタジオに呼んだ。デモ・テープを録るためだ。そのとき有希子が歌ったのは松田聖子の『青い珊瑚礁』と河合奈保子の『エスカレーション』。それによって、有希子の声質も

7万円の給料も使わないから残っちゃいます

新入社員連覇への足跡

レコーディングは84年1月に延期された。岡田有希子のデビ

ューシングル発売は4月21日。『ファースト・デート』はたち

功をおさめた。テレビ、ラジオのベスト10番組にもすべて出演。トップ・

アイドル

への道を歩みはじめた。

しかし――。

サンミュージックの福田時雄専務がいう。

「新人を育て、デビューさせる。これは一種の大きな賭けのようなものです。当たったからよいが、もし当たらずに終わったら……。会社や事務所の命運を左右することにもなりかねませんからね」

●データ③売り出しのための費用――プロダクション、レコード会社が宣伝費を投入する。その内訳は①テレビスポット、②ラジオスポット、③有線スポット、④雑誌広告、⑤宣材物。ポスター、チラシなど、⑥キャンペーン費用、⑦イベント費用、⑧プロモーションビデオ製作費用……。

このなかで最もカネのかかるのがテレビ、ラジオのスポットCMだ。岡田有希子の売り出しには、関係者の話によると「億単位」のカネが投入さ

れているという。

莫大なカネを注ぎこんでも、すぐに元がとれるわけではない。民放テレビ局の出演料は1万3000円。食事代、移動のタクシー代は自腹を切る。テレビ、ラジオへの出演はプロモートだと割りきっている事務所が大半だ。赤字でもいいから、テレビ、ラジオには出演させる。

新曲を出すたびに、新たに衣装を発注する。それもまた事務所負担。曲がヒットし、コンサートを開くとすると、ファンの満足する内容にしようと、ステージにはカネをかけ、華やかに演出することになる。そのため、新人のコンサートは赤字覚悟で行なわれることが多い。

岡田有希子も、そういう状況のなかにいる。彼女の給料は月額7万円。デビュー前は3万円だった。

サンミュージックと同じく、アイドル界に勢力をもつホリプロも、ほぼ同額。

給料はすべて銀行振り込み。

銀座音楽祭の賞金50万円など、各賞の賞金は事務所を通じて全額本人の口座に振り込まれる。

アイドルは学業と仕事を両立させる、いわば勤労少女でもある。有希子は笑いながらいった。「そうだと思います。おカネは必要なときにキャッシュカードを持って銀行におろしに行くんです。ビッピビッと暗証番号を押して(笑い)。でも、忙しくておカネをつかうヒマがない」

ハードスケジュール。それもいまの有希子を追いかけている。

●データ④ある日のスケジュール――10月×日。7時、社長宅を出発。10時半、川崎駅前岡田屋モアーズにてニッポン放送「モアモア歌謡曲」出演。13時、同場所にてファンとの握手会。16時、NON・NONのインタビュー。19時、東芝のCF(商品はパソコン)のフレコ録り。このCFは11月からオンエアされている。20

まち25万枚を売った。

以後、7月18日発売の『リトルプリンセス』、9月21日発売の『Dreaming Girl――恋・はじめまして』とつづく。

ファーストアルバムは9月5日発売の『シンデレラ』。セカンドアルバムは11月28日に発売される。タイトルは『贈りもの』。

出されたレコードはいずれも好調に売れつづけている。デビュー・シングルとグリコCMとのタイアップもまずまずの成



岡田有希子の450日

時30分DUNKの取材。23時、帰宅。

「大変だね？」との問いに、有希子は「歌いたいから来たんだもの。歌うために、わざわざ名古屋を出て、東京へ来たんだもの」といって笑った。

17歳の、強い意志を感じさせる笑いだった。

朝食はとらない。これは名古屋時代からの習慣だ。洗顔をすませ、自分の部屋で手早く薄化粧し、迎えにきた長島光代マネージャーの待つ玄関先へと階段をかけおろる。それが、一日のはじまりだ。

『ザ・ベストテン』に出演したときのことだ。あわただしくテレビ局入りし、3畳ほどの控え室で化粧を終えりとすぐにライトの照りつけるスタジオへ。リハーサルを終えりと今度は外

へ。取材を兼ねた食事だという。30分で戻ってきた。テーブルに座っていたのは実質20分。それで食事取材も完了。

キャンペーンのため地方に行き、その日のうちに東京に戻ってくるというスケジュールも月に何日か組まれる。歌が好きでなければ、自分の意志でなければ、とてもやっていけないだろう。

深夜の帰宅。自分の手で玄関の鍵をあげ、足音を忍ばせて自室に。化粧をおとし、明日は何を着ていこうかと考えるうちに眠くなる。パジャマに着がえ、ベッドにもぐりこむと数時間後には、またひたすらスケジュールをつぶしていく一日が待っている。

4月21日のデビュー以後、まだ休日はない。10月にはいって、

偶然、2日続けて。半日だけ時間があいたことがある。有希子はそのとき映画を見た。「スプラッシュ」と『インディ・ジョー

次なる目標に向かつて
チャレンジの中で新しい自分をみつけていきたい

ある音楽賞にノミネートされ、そのステージのリハーサルが行なわれていた。

有希子は自分の出番を終え、イスに座っていた。そして、コックリ、コックリと居眠りをはじめた。マネージャーに注意されるや、有希子はやおら自分の両頬をパシッ、パシッとおもいきりたたきはじめた。

その数、およそ20発。あとでその話をする有希子は照れ笑いを浮かべ「すいませ

ンス」である。「すごくおもしろかったのよ」といって、有希子は映画の話をして、うれしそうにきかせてくれた。

「みんな17やそこらの私のためにお仕事してくれてるんですからね……泣きごとはしよつちゆう女性マネージャーにいつています。ただ聞いてもらえればいいんです。でも、まだまだス

タッフに何でも頼ってしまいがちで、そんな自分は甘いと思うんです。佳代も有希子も同じ人間なんだけど、有希子のときは多少でもしつかりしなくちゃいけないと思ってるんです。この仕事やってから、ちよつとした病気がらいではなかなか休めないってこともわかりましたしね」

年末年始のテレビ番組のための収録が増え、新人賞レースも真っ盛り。そのさなか、有希子はカゼをこじらせた。病院へ行き、点滴を受けながら仕事先へ向かった。10月中旬のことだ。

チャームポイントであるはずの豊かな胸も、気のせいか元気がないように見えた。

1年前の年末、有希子はこういっていた。

「来年は、振りかえってみて今年が忙しかったなという年にしたいと思います」
まさにそのとおりになった。岡田有希子の夢は現実のものとなった。

450日前、彼女は自分がどうなるかわからずに東京行きの新幹線に乗りこんだ。その時点ではゼロだった。以後、450日の蓄積が、彼女をスーパーアイドルにおくりあげた。

「ホント、1年って早いですね。去年は、ああ(桑田)靖子ちゃん、また賞とったあ、とテレビを見て喜んでたのに。私はそれを見て、自分も賞のかかった舞台で歌いたいなと思っていました」

有希子はいうのだ。

その夢はかなえられた。しかも、数々のビッグタイトルをも

のにしている。

いま、有希子は何を考えてい

芸能人水泳大会では意外な肉体が



るのだろうか。

「1年前よりもいまのほうが、賞をほしいと思わないですね。友だちのなかで争うのがいやだし、賞をとることより、キャンペーンで私の歌をききにたくさんの方が集まってくれたことの方が私にとってはうれしい」
それが、スーパーアイドルの本音かもしれない。

「デビューのときはレコーディングの時間がたつぷりあった。このところ時間がなくなつて。もつと時間をかけてレコーディングをしたいですね。それに映画出演も。若いうちにいろんなことにチャレンジしてみたいんです。自分がどうなっていくかわかんないから。いろいろとやっていくなかで、これからのことを決められたらいいなと思ってるんです」

有希子は12月31日まで新人賞へのチャレンジを続けていくことになるだろう。

岡田有希子の最初のステップ

がそこで終わる。しかし、すぐにまたセカンドステップ

を踏むために、有希子は走り始める。

